

マリア観音をさがして

…あるいは「ほんもの」の曖昧さと
「にせもの」の魅力について

日沖直子

HIOKI Naoko

「どうです、これは。」

田代君はかう云ひながら、一体の麻利耶^{マリア}
観音^{テンプル}を卓子の上へ載せて見せた。

芥川龍之介「黒衣聖母」¹

大正9（1920）年5月、『文章倶楽部』に発表された短編「黒衣聖母」で芥川龍之介は、麻利耶観音と称するのは「切支丹宗門禁制時代の天主教徒が、屢聖母麻利耶の代わりに礼拝した、多くは白磁の観音像である」²と著した。国語辞典『大辞林』（第3版：2006）で「マリア観音」を探すと、「マリア」の下部項目として「江戸時代に、隠れキリシタンがひそかに崇敬した、観音像を聖母マリア像に擬したもの。イエスになぞらえた幼児を抱く像もある。」とある。しかし、ここでしばしば混乱を生じるのは、隠れキリシタンという言葉は、キリスト教禁制時代の信者以外の外部の人間による造語であり³、またマリア観音という聖母マリアが仏教

化したような—あるいは観音菩薩がキリスト教化したような—呼び名も、実際に慈母観音像を聖母子像として礼拝していた信者たちが使っていた言葉ではないことである⁴。1850年代末の長崎奉行所の史料からは、長崎・浦上地方の潜伏キリシタンたちがマリア像に見たてた白磁観音像を「ハンタマルヤ」と呼んでいたことがわかっており⁵、潜伏時代の儀礼を現在に言い伝える長崎地方の人々は、先祖から引き継いだ仏像を「神様」「御仏様」などと呼んでいると報告されている⁶。また、同じ長崎地方でも平戸の先、生月島に残る潜伏キリシタンの儀礼では仏像を祀ることはせず、代わりにお掛け絵と呼ばれる聖画が使われる⁷。

本稿は筆者が2016年7月22日に第1回南山宗教研究会（南山サロン）においてお

いたらしい。現在、学界の慣例として、禁教下の信者を潜伏キリシタン、禁教の高札撤廃後、再洗礼をうけずに現代にいたるまで潜伏時代の伝統を守る人々をカクレキリシタンと呼ぶのが一般的である。宮崎賢太郎『カクレキリシタン』長崎新聞社（2001）、18-26ページ。

4. 片岡弥吉『かくれキリシタン』日本放送出版協会（1967）、243-245ページ。

5. 『日本庶民生活史料集成』18巻、三一書房（1972）、833ページ。

6. 宮崎『カクレキリシタン』234、251ページ。

7. 生月島では今も比較的多くの人々が潜伏時代の儀礼を守っており、民俗学的研究が進んでいる。最新の研究として中園成生『かくれキリシタンとは何か』弦書房（2015）がある。

1. 『芥川龍之介全集』新版、岩波書店（1995-1998）、第6巻、80ページ。以下、『芥川全集』とする。

2. 同上。

3. 禁教下のキリスト教徒が自らをカクレと称していたわけではない。例えば長崎・外海地方では、彼らは古（ふる）キリシタン、しのび宗、昔キリシタン、などと呼ばれて

こなった発表の報告である。発表の主題とした「マリア観音をさがして」は、ベルギー人神学者 Els Maeckelberghe の *Desperately Seeking Mary: A Feminist Appropriation of a Traditional Religious Symbol* に想を得た⁸。Maeckelberghe の論考は歴史学と解釈学の方法、特に Paul Ricoeur のシンボル論⁹を用いて、19 世紀ヨーロッパの一般女性たちが伝統的な宗教的シンボルを、自分たちを力づける (empowering) イメージへと再生 (reinterpret) していたことを実証するものである¹⁰。ただ、発表ではフェミニスト神学やマリア論的思索からは一線を画し、むしろマリア観音というあいまいな概念とイメージが現代の日本人にとって何を意味するのかを考えていくための基礎的情報を明らかにすることに専念した。

副題とした『『ほんもの』の曖昧さと『にせもの』の魅力について』は、マリア観音の言説とイメージが大正期に生み出されて以来、今日まで拡張し続けている興味深い現象を暗示している。マリア観音という言葉在互联网で検索してみると、まずは全国各地のキリシタン資料館と多種多様な彫像が並び、それに混じって Wikipedia のロックバンド『マリア観音』の項目、フィリピン・レイテ島の太平洋戦争慰霊碑¹¹、

8. Kampen (The Netherlands): KOK Pharos, 1991 年発行。

9. "The Symbol Gives Rise to Thought," in Walter H. Capps, *Ways of Understanding Religion* (New York: The Macmillan Company) 他の Ricoeur の著作が参照されている。

10. Elizabeth A. Johnston, *Truly Our Sister: A Theology of Mary in the Communion of Saints* (New York: Continuum, 2006), 42.

11. http://www.senbotsusya.com/news_v.php?no=153
慰霊碑のマリア観音については君島彩子氏による最新の研究に注目したい。 <http://www.bunka.soken.ac.jp/report/>

マリア観音リーディング (チャネラー)¹²、アメリカ・テキサス州の瞑想センター¹³ など、実にさまざまな項目が挙がってくる。「実体」のないイメージが拡散し独り歩きしているのである。潜伏キリシタンが使用していた観音像の模造品は芥川の時代から古美術界に横行していたようであるし、また日本各地の潜伏キリシタン遺物の中に仏像が発見された際、それがどう呼ばれていたのかを確認することなく安易にマリア観音と名付けられ資料館などに展示されてしまうこともままあるようである。実際に潜伏・カクレキリシタンが使用しなかった「にせもの」を学術研究から排除することも可能だが、どのようにしてこの「実体のない言説・イメージ」が発生し、拡散し続けているのか、という疑問は現代日本社会における宗教的表象を考えるうえで興味深い課題であろう。

以下、研究会での発表内容を、資史料についての情報を補足しながら再構成する。最初に、マリア観音という造語が広く使われるようになるまでの経緯をたどり、次に、東京国立博物館が浦上キリシタン遺品として所蔵するマリア観音の図像を西洋の伝統的マリア像のプロトタイプと比較する。さらに、1850 年代の浦上の潜伏キリシタンに関する長崎奉行所の調書 (浦上三番崩れ関連資料) をもとに当時の信者たちの聖母マリアについての認識を確認する。最後に、研究会の出席者から頂戴したコメントやご意見をまとめ、今後の研究の可能性について考えたい。

h26/sent_repo_kimishima001.html

12. <http://ameblo.jp/natsue-ai/>

13. <http://www.mkzc.org/>

芥川とマリア観音言説

前述の芥川の短編「黒衣聖母」は、蒐集家の田代が所有する「禍を転じて福とする代わりに、福を転じて禍とする¹⁴」縁起の悪い観音像をめぐる奇妙で不気味な物語で、マリア観音という言葉が文学に登場した最も早い例のうちの一つである。ヨーロッパ各地に残るいわゆるブラック・マドンナ（黒聖母）像と伝承にからむオカルト的イメージとの暗合も指摘できよう¹⁵。小谷瑛輔によると、芥川が黒衣聖母の由来にまつわる伝説の舞台として選んだ新潟（正確には新潟と隣接する山形県鶴岡市）には、明治36年に日本に運ばれて以来、鶴岡カトリック教会の副祭壇に安置されている黒い聖母像が存在し、また、十日町市の寺にはキリスト教徒が聖母子像に見立てていた可能性のある、観音が抱く赤子を取り外すことのできる子安観音像とともに、黒観音と呼ばれる観音像が所蔵されているとのことである¹⁶。

1920年に発表された「黒衣聖母」には、1919年末に書かれたものかと推測される草稿が残っており、その中には「唯、多くの麻利耶観音が白磁であるのにも関わらず、田代君が見せてくれたそれは、全身黒衣に包まれた、瓔珞には金が転じてある、如何にも珍しい立像であった¹⁷」という文が含ま

14. 『芥川全集』第6巻、81ページ。1910年代の南蛮切支丹ブームは北原白秋や木下杢太郎、雑誌『明星』などが牽引していた。

15. ブラックマドンナについては、山形孝夫『聖母マリア崇拜の謎』河出書房新社（2010）第3章に詳しい。

16. 小谷瑛輔「黒衣聖母—新潟の宗教的思考と松岡讓」宮坂覚（編）『芥川龍之介と切支丹物』翰林書房（2014）253-54ページ。芥川と聖母については鈴木秀子「芥川龍之介とキリスト教」『日本文学研究資料叢書・芥川龍之介（I）』有精堂（1970）123-128ページも参照。

17. 『芥川全集』第21巻、287ページ。

れたものや、蒐集家田代ではなく「京都大学の田村君」と一緒に東京日本橋仲通りの骨董屋で「切支丹宗門禁制時代の遺物と称するまやかし物¹⁸」の中に黒衣の麻利耶観音像を見つけたというものなど、実際には日の目を見なかった断片が数々ある。ここでもうかがわれるのは当時芥川が、潜伏キリシタンがマリア像のかわりに礼拝していた観音像は通常白磁製であったと認識していたこと、また1910年代後半、骨董業界ではキリシタン遺物のにせものが出回り、その中の観音像にマリア観音という名称が使われていたらしいことである。また「長崎日録」には1922年の長崎滞在中のある日、芥川自身も白磁製の観音座像を入手、「…帰途まりあ観音一体を得。古色頗る愛すべし。」との記述がある¹⁹。

美術学界での「マリア観音」の使用については、1925年、長崎県立長崎図書館の初代専任館長でキリシタン資料と遺物に精通していた永山時英が編んだ写真入りの『吉利支丹資料集』に「マリア観音像 東京帝室博物館蔵」「マリア観音像 長崎 浦上天主堂蔵」という記述が現れ、東京帝室博物館の所蔵品から白磁製観音像が、そして浦上天主堂の所蔵品からは白磁と青銅製の観音像がマリア観音として紹介されている²⁰。東京帝室博物館のマリア観音像とは、次に

18. 同上、288ページ。さらに別の草稿には新潟の若い素封家の「田口君」とある。

19. 以後芥川は像を愛蔵し、その写真は『芥川全集』第6巻、334ページに見ることが出来る。また前後の関係から、像は信者から譲り受けたのではなく市井の骨董品店で購入したと推測される。『芥川全集』第9巻、260-61ページ、及び第24巻（年譜）、159ページ参照。

20. 永山時英『吉利支丹資料集』1926年丸善より発売。図版40、41、44参照。図版の英語のキャプションは1918年版から変わらずFigures of Avalokiteshvaraとなっている。

述べる浦上三番崩れ遺品中の観音像のことである。ただ、永山による『対外史料美術大観』（1918年）には同じ像がマリア観音ではなく「白磁観音3体、東京帝室博物館蔵」と記されているので、「同一人の著書の中で大正7年から同14年の間にマリア観音という言葉に変化している...²¹」。つまり、公的コレクションのカatalogに「マリア（ヤ）観音」が採用されたのは1920年代半ばからとするのが妥当だと考えられている。興味深いのは、芥川が1919年5月の最初の長崎訪問の折、菊池寛とともに県立長崎図書館を訪れていることである。そしてその時に書かれたものと思われる芥川のメモ（手帳）には、幕末におきた浦上の潜伏キリシタン検挙（浦上三番崩れ）事件資料に関するものがある²²。県立長崎図書館は1912年創立、永山が館長に就任したのは1914年ごろのことらしい。芥川が図書館を訪問し浦上崩れ資料を閲覧した際に永山と面識を得たことは十分に考えられる。

浦上キリシタン遺品の観音像

永山のCatalogに掲載されたマリア観音像を含む東京帝室博物館、現在の東京国立博物館のキリシタン遺物コレクションは、浦上三番崩れ（1856-1859）、浦上四番崩れ（1867-1873）として知られる長崎、浦上地域の潜伏キリシタン検挙の際に押収され長崎奉行所の宗門蔵に保存されていた品々を移管した、いわば正真正銘「ほんもの」の潜伏キリシタン遺物である²³。押収品は押収さ

れた年ごとに分別して保管されていたらしく、各遺品が三番崩れと四番崩れのどちらに属するかは目録に明記されている。2001年に東京国立博物館がそれまでの目録に大幅な増補改訂を加え刊行した最新の図版目録中²⁴、マリア観音と呼ばれるものは全て浦上三番崩れ遺品に属し、白磁製観音像、中国福建省徳化窯製²⁵で17世紀に製造されたものとされる。言い換えると、東京国立博物館の分類方法によれば、マリア観音とは浦上キリシタン遺物コレクション中に仏像が数ある中で、中国徳化窯製白磁観音像のみを指す。押収品中、白磁製以外の仏神像と日本製の観音像は、それぞれ観音菩薩像、大日如来像、地藏菩薩像、など、一般的な仏像分類に照らして識別されている。

東京国立博物館のキリシタン遺物コレクションの大半を占めるのは、ヨーロッパあるいはゴア、マカオ製と思われる、ごく一般的かつ「正統」な信心用具、ロザリオ、十字架、メダイ、プラケットなどである。いわゆる信徒発見（1865）後、パリ外国宣教会による再宣教、および潜伏信者の再教育・洗礼が水面下で密かに進行していた中におこった浦上四番崩れの遺品には異教の品は見当たらず、白磁観音像のみならず仏像が見つかるのは三番崩れの遺品からのみである。また、三番崩れ遺品がすべて仏像や仏教関連の品というわけでもなく、仏神像に混じって一般的なロザリオなどが少なからず存在する。

（2001）、16-21 ページ参照。

24. 上記。この図録は1952年に初版、1972年に改訂版が出ている。

25. 徳化窯の白磁については、その世界的コレクターであるBlumenfield氏による解説書がある。Robert H. Blumenfield, *Blanc de Chine: The Great Porcelain of Dehua* (Berkeley: Ten Speed Press, 2002).

21. 越中哲也『長崎文化考その一』長崎純心大学博物館（1998）、8ページ。

22. 手帳（四）『芥川全集』第23巻、328ページ以降、及び第24巻（年譜）120ページ参照。

23. 遺品の由来については『東京国立博物館図版目録キリシタン関係遺品編』増補改訂版、東京国立博物館

目録には損壊した状態で残る像や破片も全て網羅され、これらの点数を全て正確に数えることは困難であるが、浦上三番崩れ遺品の仏像（七福神を含む）およそ80体中、完全な姿で残っているマリア観音像（＝徳化窯製白磁観音像）は37体、その内訳は最も多いタイプである玉座に腰掛ける坐像が21体、椅子のない（直に座る）坐像が11体、立像が5体である。玉座タイプは膝に赤子を抱いているが、赤子のいない坐像も2体ある。博物館がマリア観音としなかった仏像も数々あり、日本製や中国製の如来像や菩薩像、布袋像など種々あわせて40体あまりが保管されている。ちなみに、破片の形で信者たちが大切に保存していたものはマリア観音由来が多く、潜伏信者たちにとってマリア観音像が特に大きな意味を持っていたことがうかがわれる。

ここで注目したいのは、これら浦上三番崩れ押収品のマリア観音像のうち、もっとも数が多い赤子を抱いて玉座に腰掛けるタイプである（図1²⁶）。押収品の仏像中、およそ4分の1を占めるこれらの観音座像はもともと慈母観音あるいは子安観音と呼ばれ、子宝と母性、観音の慈愛を象徴するイメージである。三番崩れ遺品コレクションにおいては、これらがみな同一窯製品と思われる同質の白磁であり、特に玉座タイプはほぼ同じ大きさで、正面を向き右手を赤子に、左手を膝の上に置くという同じポーズをとっている。そしてこの図像については、西洋絵画で玉座の聖母（Theotokos Nikoipoia）または莊嚴の聖母（Maesta）と呼ばれる古典的なマリア像のプロトタイプとの共通点が注目される。

26. 白磁製、17世紀、東京国立博物館蔵。画像は東京国立博物館デジタルアーカイブ、画像番号 C-616 <http://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/E0001746>

浦上押収品と玉座の聖母像の原型²⁷とも言えるイスタンブール、ソフィア大聖堂に残る9世紀のモザイク（図2²⁸）を比較してみると、玉座に座り正面を向く姿勢から赤子（キリスト）の位置、赤子に置かれた両手の位置、そしてヴェールを含め観音（マリア）の体をすっぽりと包む衣服など、実に類似点が多い。さらに、図1にあげた像については、赤子が握っている小さな杖状の物体も、ビザンチン様式に例のあるキリストが持つ巻物²⁹と一致していると言えよう。反対に、2つの母子像で異なる点は、観音に光輪がないこと、また観音の足元に蓮華座と龍がおり、ふたりの童子が寄り添っていることなどである。

慈母観音は、いわゆる観音三十三身（化身）の中に含まれない民間信仰的な観音イメージのひとつで、日本では子安観音とも呼ばれる。日本の子安観音は蓮華上に結跏趺坐し、胸に抱いた赤子をあやしたり、乳をあたえているものが主流で、腰掛けたポーズをとっているのは椅子文化の中国渡来物ならではの表現といえよう。そしてこの中国の慈母観音と玉座の聖母の図像上の一致が、あえて日本製の観音像ではなく中国製が聖母子像の代替として選ばれた理由にほかならないと考えられるのである。

東京国立博物館がマリア観音の製造地とする徳化窯は、最高級白磁の産地として有名で、17世紀以降西洋にも多く輸出さ

27. Hans Belting, *Likeness and Presence: A History of the Image before the Era of Art* (Chicago: University of Chicago Press, 1994), 167.

28. Mosaic, ca. 834, Hagia Sophia, Istanbul. https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Apse_mosaic_Hagia_Sophia_Virgin_and_Child.jpg

29. キリストが巻物を持つ図は再臨像に多く、再臨のキリストの場合、巻物は新約聖書の中でもヨハネの黙示録であるとされる。



図 1. 『マリア観音像』



図 2. Madonna and Child

れており、初めから輸出品として作られたもののなかには聖母子像もある。Rowena Loverance によると徳化窯製の聖母子像は着衣などに慈母観音像の影響が見られ、現存数は少ないものの、イギリスやポーランドなどヨーロッパの名門王家のコレクションに所蔵があるということである³⁰。また、反対に、徳化窯の慈母観音像にヨーロッパから伝来した聖母子像の影響があったと考える研究者も少なくない³¹。玉座の聖母像は

30. Rowena Loverance, *Christian Art* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2007), 118-119.

31. 中国の慈母観音の歴史と図像については Lauren Arnold, "Folk Goddess or Madonna?: Early Missionary Encounters with the Image of Guanyin," *Monumenta Serica* 51 (2005): 227-37. Chün-fang Yü, *Kuan-yin* (New York: Columbia University Press, 2001), 258-59. "Guanyin: The Chinese Transformation of Avalokiteshvara," in *Latter*

ザンチン時代に発生した後、さまざまな変容をとげながらルネッサンス以降にも引き継がれた、まさにマドンナ像のアーキタイプ（元型）のひとつと言えるものであり、西ヨーロッパ各地に残るブラック・マドンナつまり黒衣の聖母像の源泉であるとの説もある³²。ただし、浦上遺品中の白磁観音像については、徳化窯の一級品に比べると白磁の抜けるような白さや釉の透明感、モデリングの繊細さにおいて各段に劣っており、徳化窯製品の中でも大衆むけの大量生産品だったか、あるいは徳化窯風に日本国内の別の場所で作られたものなのか、判断がつか

Days of the Law: Images of Chinese Buddhism 850-1850, ed. Marsha Weidner (Laurence: University of Kansas, 1994), 169-75 を参照。

32. 山形『聖母マリア崇拝の謎』200 ページ。

きかねる³³。ただ、どちらにしても、庄屋の監視下、百姓をしていた浦上の潜伏キリシタンがこれらの白磁製品を自己資金で手に入れたというのは考えにくく、禁教直前に宣教師が配ったか、潜伏初期にキリシタン共同体のリーダー格がまとめて入手した可能性が高い。同形の像が何体もあることも、それで説明することができよう。

記録に残るハンタマルヤ

浦上三番崩れについては、40名近くいた逮捕者の取り調べの記録と長崎奉行岡部駿河守が吟味をまとめた書付が残っており、現在、長崎県立長崎図書館に保管されているこれらの文書の全文は、片岡弥吉による註釈とともに『日本庶民生活史料集成』に翻刻、出版されている³⁴。吟味文書の信頼性の高いことは記載事項と東京国立博物館蔵の三番崩れ遺品との整合から明白である。例えば、記録には潜伏キリシタングループのリーダーとして中野の吉蔵³⁵の名が挙げられ、彼の所持品として

先祖共より持伝信仰いたし来候ハンタマルヤと申す白焼仏像一体、イナツシヨウと申唐かね仏座像一体流金指輪様の品に彫付有候ジゾウスと申仏一体...³⁶

などを挙げているが、三番崩れ遺品の中には持ち主の名を記した没収当時の付け紙が残っているものがあり、中野郷吉蔵が原所

33. Blumenfield, *Blanc de Chine*, 65 の慈母親音像と比較。徳化窯の大量生産品については Yü, *Kuan-yin*, 433-4 参照。禁教時代に長崎（波佐見焼）で白磁観音像を密かに作っていたとの伝承もある。

34. 『日本庶民生活史料集成』18巻、833-56 ページ。

35. 浦上の潜伏キリシタンの7代目惣領だったとされる。

36. 上記、833 ページ。以下引用中の旧漢字はすべて常用漢字になおした。

有者とされているものが2点、それぞれ、白磁製の観音（マリア観音）立像³⁷と銅製の観音菩薩坐像³⁸があり、記録と合致している。ここで片岡は、ハンタマルヤは Santa Maria、イナツシヨウはイエズス会の創始者聖イグナチオ（St. Ignatius）、ジゾウスはイエズス（Jesus）の訛りだとしている³⁹。

浦上三番崩れは日米修好通商条約の交渉中という江戸幕府にとって前代未聞の外交的に緊迫した時期と重なり、長崎奉行には自分の管轄下に200年以上にわたり御禁制のキリシタンが潜んでいたことを今さら認めることはできないという背景があったと考えられる。一大外交問題に発展したその後の四番崩れとは違い、ここでは結局、吉蔵らリーダーたちが牢死して共同体が伝統の継承者を失うという悲劇があったものの、一件は「邪宗」ではなく「異宗」問題として表向きは比較的穏便に処理され、吉蔵の息子をはじめとして逮捕者の大半は釈放された。

当時の記録にのこっている観音像の名称であるが、まず、三番崩れの吟味記録のなかにマリア観音の語は一切登場しない。吉蔵をはじめ他の逮捕者の申し立てには、一貫して白焼仏像をハンタマルヤと呼んでいたことが記されている。ハンタマルヤは「リウス⁴⁰」の母であり、したがって、子を抱いた観音像はハンタマルヤとリウスの姿を表している。長崎奉行岡部駿河守の記述では、

37. 『東京国立博物館図版目録キリシタン関係遺品編』増補改訂版 48 ページ © 83 (C600) の写真および解説参照。

38. 上記、64 ページ © 139 (C660) の写真および解説参照。

39. 『日本庶民生活史料集成』18巻、854 ページ。

40. リウスはイエズスの訛りと考えられるが、ジゾウスとリウスを同一人物としていたか、別人だと誤解していたかは定かではない。

村内信仰のもの共所持いたし候仏の儀は白焼にて子を抱候女体の仏有之、則リウス幼稚の砌ハンタマルヤ養育いたし候体の由、これは世上に子安観音として流布いたし其余唐かね木像等にて様々形替り候仏はハンタマルヤ艱難修行中化身の姿と申し伝⁴¹。

とあり、白磁だけでなく鑄造仏の中にもハンタマルヤとされていたものがあったことがわかる。

前述のように、幕末期の長崎奉行には検挙と厳しい尋問によって潜伏キリシタン共同体に決定的なダメージを与える一方で、ことをできるだけ穏便にすませたい事情があった。そんな中でも、岡部による吟味のまとめはなかなか詳細で、ハンタマルヤの由来にもおよび「一体異宗の本尊はハンタマルヤと申、右流浪中リウスと申仏を出産いたし候⁴²」と記されている。またその続きに天草での潜伏キリシタン取り調べに触れ、天草では本尊はハンタマルヤではなく「本尊は天地の主デウス、右母はサンタマルヤと申仏の由⁴³」だったとも述べている。さらに、浦上逮捕者の中には勝三郎という男のように「子安観音と唱候白焼立像一体、同座像一体所持いたし、右はハンタマルヤと申仏にて異宗本尊の由⁴⁴」と、取り調べにあって先祖から伝わった像は子安観音である、つまり、これは仏像であってキリスト教とは関係ないと言い逃れたものの、「仏」の名はハンタマルヤだと、現代の我々からすれば「語るにおちた」ともいえる真っ正直な証言をしたものもいた。

いずれにしても、「マリア観音」の源泉といえる 1850 - 60 年代の浦上地域の潜伏キ

リシタンの間にはマリア観音という呼称は存在せず、一貫してハンタマルヤが使用されていた。これは潜伏キリシタン伝承『天地始之事⁴⁵』に登場する「(びるじんさんた)丸や」とも一致する。そして浦上のハンタマルヤ像には白磁製が多く、子を抱いた子安観音タイプの像はハンタマルヤがリウスを抱く姿だと認識されていた。イナツシヨウの像についての記述があるのは吉蔵の証言のみであるが、先にのべた東京国立博物館に残る彼の遺品⁴⁶を検分すると、やはり同じ観音像でも男性的に見えるものがイナツシヨウにあてられており、潜伏キリシタンたちがさまざまな形状の観音像を、図像を考慮したうえで聖母子像だけでなく聖人像にも巧みにあてはめていたことがうかがえる。

まとめ

浦上三番崩れ記録と遺品のマリア観音については、すでに古典となった浦川和二郎の著作をはじめ、美術史学者の若桑みどり、仏教学者の藤原暹らの優れた研究と論考がある⁴⁷。これらの先行研究を踏まえつつ、さらに深く高札撤廃から現代にいたるマリア観音言説を考究していくにあたり、ここでまとめとして研究会の場で頂戴したコメントとご意見を紹介し、現時点で出来る限りの回答を記してみたい。

45. 「天地始之事」は海老澤有道他編『キリシタン書排耶書』岩波書店(1970)に収録。

46. 註 37、38。

47. 浦川和二郎『浦上切支丹史』全国書房(1943)、若桑みどり『聖母像の到来』青土社(2008)、藤原暹「辺土仏『マリア観音』の深層」『観音信仰』雄山閣出版(1982)。これら先行研究については拙論“Deconstructing Maria-Kannon” *Japanese Religions* 40 (2016) で詳しく論じた。

41. 『日本庶民生活史料集成』18巻、835ページ。

42. 上記、852ページ。

43. 同上。

44. 上記、838ページ。

まず、現在「カクレキリシタン」として潜伏時代の信仰と儀礼を守る人々にとっての MARIA 観音についてであるが、長年、長崎・外海地方でフィールドワークを続けている南山大学のムンシ・ロジェ准教授より、外部とのやりとりにおいてはすでに「MARIA 観音」の呼び名が定着しており、自分たちの間でのみ先祖から伝わった仏像を「MARIA さま」と呼んでいるとご教示いただいた。長崎地方においては、冒頭で記したとおり、仏像を代替として使用することが定着していたのは浦上・外海・五島エリアであり、生月島にはその風習が存在せず、お掛け絵、ごぜんさま、と呼ばれる信者手書きの聖画が使用される。しかしながら、以前、平戸市生月町博物館の中園成生氏に教えていただいたところでは、生月でも近年「MARIA 観音」像を新たに入手して祭壇に加えた家があったとのことだ。伝統を固く守りつつも、変化を続ける現代の共同体のありさまの一端がうかがえる。

また、実体のない言説としての MARIA 観音を考えるにあたり、「かくれ」ていることに何らかの意味と「魅力」があったのだろうか、というご質問をいただいた。芥川については、まずは彼独特の異国趣味に繋がるオカルト（＝隠されたもの、秘教）趣味があげられるであろう。芥川の作品のなかで南蛮物、切支丹物と呼ばれる作品群は、単に作家がキリスト教と 1 対 1 で対峙するだけではなく、そこに描かれる西洋の神（神々）は宗教的に多元的なものであることが指摘されている。「黒衣聖母」についていえば、作品の結末で語られる、聖母像の台座にあるラテン語銘はローマ神話を示唆す

るものだという⁴⁸。さらに、Rebecca Suter の論考では、1890 年代から 1920 年代にかけ発生した内村鑑三の不敬事件（1891）や第一次大本事件（1921）など宗教にたいする弾圧、そして 1910 年の大逆事件（幸徳事件）にからむ社会主義者や無政府主義者に対する厳しい肅清との関連が指摘されている⁴⁹。当時の知識人層が社会主義から転向したことと並行して、宗教的のみならず政治的な棄教行動とその心理への関心の高まり、「かくれ」て信仰・信念を持ち続けることに共鳴し、ヒロイックなロマンを感じるむきがあったのではないかというのである。芥川の作品に関して言えば、私見の限りでは、彼の南蛮物に政治的な暗示がこめられている可能性は少なく、むしろ作家の関心はオカルト的な母神のイメージに向けられていたのではないかと思う。しかし、1920 年代という、さまざまな宗教・政治思想の繚乱と肅清が同時に進行していた時代背景と、その時期に MARIA 観音言説が出現し、骨董業界に「にせもの」が出回りはじめたこととの間には何らかの関係があっても不思議ではない。特に宗教的ユニヴァーサルイズム、「万教同根」的思想と、キリスト教と仏教の融合たるべき「MARIA 観音」との関連については、まだまだ掘り起こすべきものがそこに残っているように考えている。

ひおき・なおこ
南山宗教文化研究所非常勤研究員

48. 小谷「黒衣聖母」250 ページ。

49. Rebecca Suter, *Holy Ghosts: The Christian Century in Modern Japanese Fiction* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2015), 73-75.